悦楽のテーマパーク３

リバース・ラビット

体験版

作・@１０３９

■登場人物

椎名（しいな）　未央（みお）

フィオと拓海の娘でありミトと双子の兄妹。父親のことを知らず育つが、溌剌とした明るいボーイッシュな少女。母親譲りのブロンドボブカットで肌は透けるように白く瞳はルビーのように赤い。身長は１４０センチと低いが、母に似てスレンダーな身体に発育が楽しみな柔らかな膨らみを既に見せている。

生命エネルギーを燃焼させ炎を起こすフレアラビットを演じ、真紅のバニーコスチュームで戦う。

椎名（しいな）　海斗（みと）

ミオの双子の兄。妹と違い気弱で大人しい性格。女の子のように長く奇麗なブロンドを後ろで束ねている。顔立ちはミオと同じで母に似ている。瞳はエメラルドグリーン。

植物の生命エネルギーを操作できるアースラビットを演じる。。

椎名フィオレッタ

かつて腹違いの姉ミナとアリス・ナイト・ラビリンスというバンドを組み、シャイニング・ラビットという特撮ヒロインも演じていた元アイドル歌手。キメラ遺伝子を狙う組織から逃れ、日本で芸能事務所アリスプロダクションを経営しながら社長である拓海と姉妹たちを探している。

小宮（こみや）　真希鳴（まきな）

漆黒のストレートヘアを優雅にきらめかせるクールな少女。物静かで背が高いので同い年でもお姉さん的な雰囲気がある。
生命エネルギーを静め、凍結もさせることができるスノウラビットを演じる。

小宮（こみや）　九朗（くろう）

通称クロちゃん。ちょっとお調子者だが頼れるミナたちのマネージャー。小宮万丈の義理の息子。真希鳴とは従兄妹にあたる。

ありま　たくみ
有馬　拓海
事務所の社長であり、ミナ、フィオ、麻衣香とは同じキメラ遺伝子を持つ異母兄妹。現在はミナたちと共に消息不明。

ありま　みねお
有馬　峰雄
銀狼と恐れられた銀髪の凄腕実業家。リゾート開発の大手有馬グループの総帥でありながら闇社会にも幅を利かせ、闇のテーマパークを世界中に作っている。その裏で自らの身体に宿るキメラ遺伝子を研究させ、新たな人類を作ろうとしている。現在はシルバー・ゾディアックと名乗り、バイオ産業大手のヴァーミリオン社を買収し、キメラ遺伝子を持った怪人を生み出している。

こみや　ばんじょう
小宮　万丈
拓海不在の事務所を支えてきた副社長。峰雄とも旧知の仲であり、ナイトメアのことを知りながら拓海たちをサポートしてきた。

■プロローグ　ザ・ナイトメア・ワールド

「漆黒の悪夢へようこそ、アリス・ナイト・ラビリンス」
アメリカの広大な砂漠のど真ん中に作られた巨大テーマパーク。その名もナイトメア・ワールド。そのオープンを祝うために1ヶ月に渡ってナイトメア・ワールド・フェスティバルが開かれている。園内に設けられた十数個のステージで数々のイベントが連日連夜息つく暇もなく来場者を楽しませている。
だが、一般の来場者は知らない。閉園を迎えた深夜、テーマパークの中枢部で行われている饗宴。それこそが、このテーマパークの本当の姿だと。セックスとヴァイオレンス、欲望と狂気が渦巻く、モラルも法も無視した悦楽のテーマパークこそが、この楽園の正体であると。
「久方ぶりだな。このナイトメアのことを忘れられず、ここまで追いすがってきたのかね？」
そこに君臨しているのは邪悪なピエロともいうべき異様な仮面を被った巨漢。黒いマントに身を包み、銀色に輝く仮面だけが暗闇に浮いているように見える。舞台に飛び上がってきた2人組の少女を冷たい仮面の視線が射抜く。
「追いすがってなんかないよ！　あなたがこれ以上ひどいことしないようにやっつけに来たんだからっ！」
古代ローマの闘技場を思わせる客席に囲まれた円形のステージ。それ故にナイトメア・コロッセオと名付けられている。ステージの上には上方の客席からもよく見えるように大画面

のスクリーンとスピーカーも備えられ、全方位からステージ上の出来事を余すことなく鑑賞できる。だが、その客席に座ることができるのは政界や財界、そして裏社会に力を持つ一部の権力者たちに限られる。だからこそ、金も法も度外視したことが行われる。

「相変わらず気だけは強いな……。そちらのブロンドの娘は初めてだな。だが、聞いているぞ。私の残した島で随分と楽しい思いをしたんだろう？」

「こんな男が私とミナの……。もうあんなこと繰り返させんぞ！」

このテーマパークを作った男は、島をまるごと一つ使った遺伝子実験施設までも建設している。本来の目的とは別に生まれたモンスターたちをテーマパークで利用することで、悪夢のようなステージを更に異次元のものにしている。それが闇社会に生きる獣のような人間を引き寄せているのだ。

そして今宵もまた、新たなる夢魔の舞台が開かれようとしている。主演は愛らしい美少女2人。アリス・ナイト・ラビリンスというバンドでナイトメア・ワールド・フェスティバルにも出演したナイトラビットこと小園内ミナとシャイニングラビットこと椎名フィオレッタ。特撮番組ナイトラビットから生まれた美少女アイドル。

ロングストレートの黒髪がきらめく清楚ながらも溌剌とした純和風の清純派アイドル小園内ミナが、肌も露なバニーガールの衣装に身を包み、アイドルとは思えないほどの本格的なアクションをこなすことで一躍人気番組になり、ミナも国民的な人気を誇るアイドルとなった。

ブロンドヘアと蒼い瞳、透き通るような白肌の小柄ながらも肉感的な美少女、椎名フィオ

レッタは世界的に活躍するハーフのロックディーヴァでもあり、劇場版ナイトラビットの主題歌を歌うことで劇中にもナイトラビットを助けるシャイニングラビットとして登場。
その後、2人を中心にバンドが組まれ、美少女二人が織りなすハーモニーと、そのセクシーな衣装でアリス・ナイト・ラビリンスも一気に人気を得た。その世界進出の第一歩がナイトメア・ワールド・フェスティバルだった。
だが、それはあくまで建前。そして、ナイトメアもラビット達もそれが建前だと知っていた。真の目的、真の戦いがあることを。ミナとフィオが敢えてこの夢魔の劇場にやってきた理由は、このテーマパークを作った男であり、彼女達の父親である男の野望を砕くこと。だがそれは、この悪夢のテーマパークを潰す、などということでは終わらない。
男の真の目的は、ミナやフィオもその身に宿すキメラ遺伝子を持つ者たち、遺伝子改造を受けたキメラ・チルドレンを探し、彼らが上位の存在として人類の上に立つこと。そのためにキメラ遺伝子の保有者の種を娘たちに植え付け、新たなる種を増やそうとしている。
だが、人間社会を破壊し、支配するようなことを認めることなどできないし、それに加担させられるなど受け入れられるはずがない。だから、娘たちは、自分たちの運命を歪め、おぞましい陵辱の輪廻に巻き込んだ男の野望を阻止することを選んだのだ。
「ミナたちは、あなたの野望を止めてみせる」
「そのためなら、私たちは父親であるお前を倒すこともいとわないからな」
スポットライトに照らされたステージに堂々と立ち、仮面を着けた黒いマントの大男を鋭く指差し、眼光鋭く睨みつけるバニー姉妹。

「くっはは、まるで本当に子供向けのヒーロー気取りだな。だが現実は正義に厳しいものだ。純潔であるべきヒロインは穢れにまみれ、卑しい本性を暴かれるのだ」
漆黒のマントがフワリと落ち、そこに何者もいなかったかのように仮面がステージに落ちる。残されたのは乾いた金属音とバニー少女たちだけ。二人が周囲を警戒するように見渡すと、いつの間にか客席が明るく照らされ、満員の大観衆がステージを注目している。
本来ならステージだけが明るく照らされるものだ。だが、少女たちも知っている。見られている。その事実を、あの男は彼女たちに突きつけているのだ。数多の視線を。視線を浴びせられる中でこそ、恥辱というのは一層重くのしかかり、熱く身体を焼き焦がす。
「出てきなさいよ！　みんなの前でやられるのが怖いの？」
清楚な面立ちだが、ミナは気が強いし、正義感も強い。本気で父親でもある男を叩きのめして、こんなテーマパークを利用して、世界を支配しようなど許せないのだ。
「ミナ、気をつけろ。何か出てきたぞ。どうやら、あの男は自分で私たちの相手をするつもりはないようだな」
ステージの下から何かがのそのそと這い上がって来る。巨大なクモ。身体の大きさならフィオと同じくらいだろう。そんなものが存在するだけで異常だが、ナイトメア・アイランドという遺伝子改造の実験施設を身をもって味わってきた2人には驚くほどのことではない。
むしろ驚くべきなのは、2人にとって目の前の怪物が恐れるほどの脅威ではないということだ。軽やかに駆け出したミナが巨大グモの眼前で飛び上がり華麗に宙を舞う。
「たぁっ！」

気合いの声と同時に全身が矢のように鋭くクモの背中に突き刺さる。身動きを封じられたクモの前で踊るように身を翻すフィオ。その爪先が目にも止まらぬ速度で巨大昆虫の頭を胴体から切り離し、客席まで蹴り飛ばす。
忌まわしいキメラ遺伝子のおかげで少女たちは特撮ではなく、本物の超人としての能力を小さな身体に秘めていた。その力を覚醒させ、使い方を知れば怪物など敵ではない。
「ふん、他愛ない……。こんな低俗な虫けらで私たちの相手が務まると思っているとしたら、期待はずれの愚か者だな」
沸き返る観衆の下卑た野次も意に介すことなく、ブロンド少女は居丈高に腕組みしてふんぞり返る。ミナよりは小柄なのに見事な谷間を誇る豊乳が強調されて視線を集めているのも気にしない。背が低いこと以外は全てに自信を持っているのがミナにも伝わってきて、形は良いが控えめな自分の胸がちょっとチクリと痛む。
「テレビに出てくるそのままに間抜けなヒロインたちだな……」
「何ですって！」
嘲笑う声に黒髪のバニー少女がいきり立つ。その足下で絶命したはずの巨大昆虫が不気味に蠢く。
「いっ、な、何これ？　し、死んでないっ！」
クモの甲殻が崩れ落ちると、中から半透明の生物がずるずると不気味に這い出して来る。これが本体なのだろう。硬い殻で身を守る軟体生物。しかも余程縮こまっていたのか、にょろにょろと異様なほどに長い脚が何本も這い出て来る。

「離れろ、ナイトラビット！」
シャイニングラビットことフィオレッタが左手首のブレスレットを外すとフラフープのように大きなリングになる。劇中でも使われるシャインリングを彼女は実際に武器として使える。そのための訓練も積んできた。
「はぁっ！」
気合い一閃、リングが鋭く回転し軟体生物を薙ぎ払う。リングは遠心力を加えることで角材を切断するほどの切れ味を生む。だが、まるでぬめるゴムのように粘液にまみれた軟体はリングを受け流してしまう。
「何これ、おっきぃ……」
思わず絶句するほど殻から出てきた八本脚の半透明な生物は細く、そして巨大だった。アメンボに似ているかもしれない。天井近くまで上がって行った胴体から伸びた触覚が獲物を探すように辺りを伺っている。
「ぼけっとするな、ナイトラビット。あいつ、私たちの武器じゃ……」
「そ、そうだよね。ミナのナイトアローもあんな細い身体に命中させらんないよ」
ミナは腰に弓を装備している。彼女の動体視力とバランス感覚、正確無比な射撃力は常人を逸している。とはいえ、相手は細く、柔らかく、さらには粘液によって身体を保護している。
「心配には及ばん。その蟲は外が嫌いでな。すぐに手近の無抵抗な生物に寄生する」
「き、寄生？」

まさか自分たちにと思ってバニー姉妹は思わず身を硬くする。だが、見上げていた天井付近に別の人影があるのに気づく。吊るされている、人。
「そんな、ま、麻衣香さん！」
特撮番組ナイトラビットのディレクターでもあり、カメラマンでもあり、そして彼女もまた２人の少女の異母姉でもある。ホワイトラビットの衣装を着せられ、ミナたちと同じようにナイトメアの陵辱も受けている。
「お前たちの姉は捕えられて足手まといになるのが得意なようだな、くっははは」
ナイトメアの高笑いが響く。
「た、拓海は？　あのバカは、どうしたんだ！？」
有馬拓海。ミナにとってはマネージャーでもあり、恋人、そして麻衣香の幼なじみの青年。だが、彼もまた忌まわしいナイトメアの血族であり、少女たちの血縁でもある。
麻衣香と拓海はミナたちがナイトメアの気を引きつけている間に施設の中枢から権利書や研究データを盗み出すはずだった。どうやら計画は失敗に終わったようだ。
「バカ息子はようやく我々の実験に協力することを承諾した。条件としてお前たちを逃がすことになったがな」
「う、嘘だよ！　拓ちゃんがそんな簡単に……」
言葉で否定しながらも、拓海の優しさはミナが一番よく分かっている。自分の身を犠牲にしてミナたちを守ろうとしている。
「ただし、人の命という物は平等であるべきではないかね？」

ナイトメアの声が少女たちを嘲っているように聞こえる。いや、実際そうなのだろう。そうこうしている間にステージに甲高い悲鳴が響く。
「ひぃ、あ、いあああぁあっ！」
吊るされていた麻衣香の身体に透明な巨大アメンボがとりついている。ホワイトラビットの衣装を着せられた長身グラマー美女の脚があられもなく広げられ、その脚の間に頭を潜り込ませた蟲は女の悲鳴など意に介さず、ぐぶぐぶと体内に潜り込んで行く。なんと排泄口を押し開けて。
「ま、麻衣香さんっ！　ま、麻衣香さんに酷いことしないでよ！　麻衣香さんも一緒に解放してっ！」
「拓海と引き換えにここを出られるのはどちらか1人だ。ホワイトラビットは拓海より先に無条件で捕えたから勘定には入らん。さぁ、好きな方が舞台を去るがいい」
あっさりと言いのける。少女の嘆願など毛頭聞く気はないのだ。むしろ拓海が出した条件を利用して少女たちを弄ぶ。それこそが、ナイトメアの真意であり、この悦楽のテーマパークの愉しみなのだ。
金属音が響き、拘束具から解放された麻衣香が軽やかにステージに降り立つ。そのアナルから、そして口から不気味な透明の触覚か触手のようなものがうねうねとのたうつように蠢く。グラマーなバニー美女の動きは明らかに本人の意思を反映していない。普段はボブカットがよく似合う快活な姉御肌の麻衣香。だが今は、虚ろな眼差しの操り人形と化して、獲物を探している。

「その蟲の好物は女の体液。吸い口は２つある。お前たちの姉の分、そしてここに残る方の分だ」
　余りにも残酷で冷徹な言葉。バニーアイドル姉妹にどちらかの身を犠牲にすることを強制しているのだ。
「ミ、ミナ……あいつの言うことなんて聞く必要はない。一旦、２人で一緒に逃げよう。２人ならなんとかなる。もう一度作戦を立てて麻衣香と拓海を助けに来よう！」
　ブロンドの小柄な少女が姉の手を引く。だが、こんな時だというのにいつものようなアイドルらしい朗らかな笑みのミナがそこにいる。
「フィオ、大丈夫だよ。ミナがここに残って、麻衣香さんと拓ちゃんを助けるから。ミナ、フィオのお姉ちゃんだもん！　妹のために頑張っちゃうよ！」
　フィオが呆気に取られている隙に、その小さな身体がステージの下へと突き飛ばされる。そして怪異な蟲に身体を乗っ取られた姉の身体を小さな美少女アイドルが優しく抱きしめる。
「麻衣香さん……ううん、お姉ちゃん。一緒だもんね。麻衣香さんはミナのことずっと愛してくれてたし、２人は相思相愛だったもんね」
「ミ、ミナ……に、逃げるんだ……」
　かろうじて意識を取り戻した麻衣香の言葉にそっと首を振るミナ。姉の口から伸びてきた不気味な触手を甘んじて受け入れ、そのまま唇を重ねる。体内に潜り込んで来る不快な感触。下半身にも触手が絡み付き、体液を吸うための触手が愛らしい少女の秘口を、恥ずかしい菊門をこじ開け、潜り込んで来る。同性で、拓海がいながらも密やかに恋人として何度も身体

を重ね、お互いを求め合った2人。衆人環視の中だろうとお互いの愛情に偽りがないが故にミナは堂々と麻衣香を受け止めたのだ。
「んぅ、あ、うぅぅ……」
愛らしいくぐもった嬌声。お互いの吐息を吸い、お互いの唾液を飲み交わし、肌と肌を擦り寄せて美しいバニー姉妹はステージに倒れ込み、縺れ合っていく。
「ミナ……麻衣香……わ、私……」
「こっちだよ……」
おぞましい蟲に絡み付かれながら愛し合う姉たちに見とれ、身動きも取れなくなっていたブロンド少女の手が急に引かれる。およそこの場にそぐわない少年がそこにいた。おそらくフィオと同じ年頃だろう。少女のようにも見える端正な顔立ちの少年は思いもよらぬほど強い力でフィオを引っ張り、暗闇に紛れ、ナイトメア・コロッセオを後にする。
「ま、待て！　だ、誰だお前は！　わ、私はミナを置いてここを逃げるわけにいかないんだっ！」
抗おうとしても少年は有無を言わさずフィオを引っ張っていく。キメラ遺伝子を宿した少女は大人でも敵わないほどの力を持っている。なのにか細い身体の少年は振り向いて笑顔を見せるほどの余裕がある。
「何者だ、お前……」
「とりあえず、君の味方かな」
意味ありげに微笑む少年が頑丈そうなドアを指紋認証で開ける。味方とは言っているが、

明らかにこのテーマパークの関係者に間違いない。とはいえ、従業員として働くような年頃には全く見えない。
　ドアの向こうには小型のヘリコプターがある。どうやら屋上から飛び立てるようになっているようだ。
「本当に私を逃がすつもりか？　どうせまた汚い罠を仕掛けているんだろう？」
　通路の向こうから大勢の足音が聞こえて来る。フィオたちを追いかけてきたのだろう。
「早く行って。操縦は簡単だから大丈夫だよね。あいつらは僕が止めておくから」
　信じられるはずがない。だが、少年の目が嘘を言っていないことを告げている。次々と予想外の事態が起こって混乱している。それでもフィオはミナと拓海の意志、そして少年の言葉に従うのが唯一自分にできることだと分かっている。だから、少女は小型ヘリの横にある昇降ボタンを押し、屋上へ向かう。

「客席からショーを楽しむんじゃなかったのか？」
「僕もステージに上がってみたかったんだ」
「いずれ嫌でも上がることになる。同い年の娘と遊べると楽しみにしていただろう？」
「あの子はもういい。分かるんだ。あの子、もうお腹にいるよ」
「……何だと……そうか、面白くなるな」
「うん、だからこっちも用意しなくちゃね。お兄ちゃんには悪いけど、あいつはもう役目を果たしたんだから、代わりに一番大事な子を貰っちゃうね」

「ふん、くれぐれも観客を楽しませることを忘れるな」
「分かってる。恥ずかしくて、悔しくて、悲しくて、気持ちよくて、嬉しくて、一生心に傷が残るように悦ばせてあげるからね」
肛門と膣口を触手で広げられ、その中をライトで照らされ、カメラで覗き込まれ、それを大観衆に公開されながら喉奥まで陰茎を捩じ込まれている。それがアイドル美少女、小園内ミナ、そしてその愛する姉、麻衣香の晴れ姿。
特撮ヒロインの衣装に身を包んだ美女は実の父親の長大極太のペニスを喉奥まで咥えこまされている。その姉と背中合わせでお互いの手を手錠で繋がれて正座をさせられている黒髪のアイドルはフィオを逃がした少年の身体に似つかわしくない巨棒を口一杯に頬張っている。
「モニターに映ってるの分かるかな、ナイトラビットのお姉ちゃん？　あの一番奥に映ってる子宮口の奥まで僕の精液たっぷり注ぎ込んであげるよ。大好きな拓海兄ちゃんとじゃダメだったみたいだけど、今日は僕がお姉ちゃんに可愛い赤ちゃんをプレゼントしてあげるからね」
愛くるしい無垢な笑顔でおぞましい言葉を言い放つ少年が、瞳に涙を浮かべるアイドル少女を力ずくで捩じ伏せ、高く掲げさせた尻を鷲掴みにし、モニターに大映しにされる中でゆっくり堂々とそのサーモンピンクの肉壷に雄々しい肉の塊を捩じ込んでいく。
少年の確信に満ちた言葉に嘘はなかった。この日、ナイトメア・ワールドから脱出したフィオは作戦決行の前夜、拓海の子を身ごもっていた。
そして、姉であるミナは、愛する麻衣香とフィオ、そして最愛の拓海のためにその身を犠

牲にし、悪魔の魂を宿した少年の子を身ごもった。
これが、ミナたち3姉妹の戦いの終わりでもあり、新しい始まりでもある。

Copyright(c) 2009 @039 All rights reserved.
この作品における内容全部について、無断複写・複製・転載はお断りいたします。
URL：http://1039run.blog90.fc2.com/